平成23年3月31日発行

名古屋女子大学

12号

総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education

巻頭言

総合科学研究所主任　渋谷　寿
SHIBUYA Hisashi

最近のPISA2009（国際学力調査）によると、ゆとり教育から学力重視に路線変更した日本の子どもたちの学力は、数字の上では前回の調査結果よりも向上しましたが、世界のトップレベルの国々とはまだ差があります。しかし、PISAはあくまでペーパーテストの結果ですから、本当の学力は、人間力として重要と思われる創造力などを含めて捉えなくてはならないでしょう。

今回の調査で総合的な学力で世界のトップレベルを維持したフィンランドでは、数字上の学力向上を目指すのではなく、創造力に関わる「スロイド（手工）」をはじめ、子どもが成長する上で総合的で調和のとれた人間教育が行われています。この事実こそ重要であり、PISAの結果はそれらの成果の一部として後からついてくるものなのでしょう。このような教育の考え方の背景には、フィンランドの総合的な高い文化レベルが関係しているように思われます。

文化とは、『広辞苑』（第五版）によれば、「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ科学・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形式の様式と内容とを含む。」とあります。総合と調和の概念を含む「物心両面の成果」である文化とは壮大な概念ですが、これらの内容は総合科学研究所の目指す事業と重なっているところがあることに気づきます。

今、本研究所が機関研究として取り組んでいる、女子教育・幼稚園・中学校・高等学校・大学教育に関する研究は、現在と未来の教育のあり方を探る学問として意義深い研究です。また、公的機関と連携した地域貢献事業は、地域との調和を目指した生活文化に関わる内容を実施しています。これらの総合科学研究所が取り組んでいる文化的意義を含んだ事業をご理解いただき、より多くの先生方にご参加いただくことを望んでおります。

平成22年度 総合科学研究所「開かれた地域貢献事業」報告

〈地域貢献（H22年度）〉家政学部食物栄養学科：片山直美、家政学部生活環境学科：石原久代、文学部児童教育学科：宇野民幸・渋谷 寿㈹・鈴木方子、短期大学部保育学科：平井孔仁子・幸 順子、短期大学部生活学科：石毛恵美枝・市原千博・榎本雅穂・大澤香奈子・北川剛一・成田公子・原田妙子㈹・松本貴志子・宮澤秀治、名古屋女子大学同窓会「春光会」：小原玲子・衣川美智子・構実千代・秋山三子・杉浦久仁子・田村たみ子

平成20年度に地域の公共施設である名古屋市瑞穂児童館・瑞穂福祉会館の新館開館イベントとして「みんなで遊ぼう！―子どもから高齢者まで」と題して始まった総合科学研究所の「開かれた地域貢献事業」は、3年目を無事終えることが出来ました。

本年度は、昨年に引き続き名古屋市瑞穂保健所と名古屋市瑞穂児童館の両公共施設とのコラボレーション事業として、学内公募という形で、本地域貢献事業への参画を先生方にお願いし、新たな領域が加わった本学ならではの充実した企画が採択されました。さらに昨年度の問題点などを検討し、内容を強化しながら交流事業を展開いたしました。

（文責：原田 妙子）

1 名古屋市瑞穂保健所との交流事業

平成22年度 認知症・うつ予防教室
「若がえり教室キラキラコース」
平成22年9月～平成23年1月（汐路学舎で実施）

「作ってみよう　世界に一枚だけ　オリジナルＴシャツ」
「歌ってみよう～永遠の英語ポップス～」
「おしゃれな自分を発見
　自分らしさを表現するカラーコーディネート」
「簡単料理『おいしく食べて健康に』冬の風邪防止〈薬膳料理〉」
「作ってみよう　香りのよいヒノキを使って～木工作品～」

2 名古屋市瑞穂児童館との交流事業

①クリスマスイベント「第2回 クリスマスを皆でたのしもう！」
　平成22年12月11日㈯・12日㈰

イルミネーション、「オーナメントクッキーをつくろう」講座、各種イベント「お話タペストリー・ペープサート・ハンドベルなどを楽しみましょう」「おねえさんとあそぼう」「ヒノキを使って『遊べるクリスマスの飾り』をつくろう」「おまつり気分で遊ぼう・『てんかい図』をつろう」

②交流事業の各種講座　平成22年9月～平成23年2月

「音とコンピュータのあそび」「乳幼児の食育相談」「ビタミンたっぷりプルプルお肌、タンパク質で細マッチョ―野菜と仲良しになろう 豚肉カレーと野菜を使ったおやつ」「おねえさんといっしょにあそぼう」「英語で歌ってロックン・ロールタイム」「子育てグループ教室―親子遊びと保護者の交流」「ひなまつりの伝統菓子『おこしもの』作り」

作ってみよう　オリジナルＴシャツ

歌ってみよう～永遠の英語ポップス～

ハンドベルで楽しんだクリスマス

ひなまつりの伝統菓子作り

機関研究報告　「創立者越原春子および女子教育に関する研究」
～職業人としての専門教育――教員養成と医学を中心に（19世紀後半～20世紀前半）～

石倉瑞恵・氏原陽子・木原貴子・遠山佳治・羽澄直子㈹・依岡道子

当研究は、本学創立者越原春子の建学の精神、教育理念および国内外の女子教育について多角的に検証することを目的としています。第三期（平成21年～22年）最終年となる今年度は、「職業人としての専門教育――教員養成と医学を中心に（19世紀後半～20世紀前半）」をテーマとし、研究メンバーが各専門地域の歴史や事情をふまえた研究発表と質疑応答を行ないました。

・氏原陽子「隠れたカリキュラムによるジェンダー・メッセージの伝達」

・木原貴子・依岡道子「イギリスにおける二人の『最初の』女性医師――エリザベス・ブラックウェルとエリザベス・ガレット・アンダースン」

・遠山佳治「日本における最初の女性医師たち――荻野吟子・生沢クノ・高橋瑞子・吉岡弥生を中心に」

・羽澄直子「19世紀アメリカにおける医療と女性――女性が医学を学ぶ場所」

・石倉瑞恵「チェコにおける最初の女性医師アンナ・バイエロヴァ――その生涯と19世紀女性運動におけるインパクト」

結果的に「女性と医学教育」に関する発表が中心となりました。医学教育のシステム、歴史的、文化的背景の相違はありますが、それぞれの国で女性医師が誕生した経緯には、女性に対する厳しい社会的制約に挑みパイオニアとして闘う彼女たちの意志の強さ、それを支える周囲の女性たちの連帯など、共通点も多いことが比較検証のなかで確認されました。（文責：羽澄直子）

機関研究報告　「大学における効果的な授業法の研究５」
～多様な学習成果の評価方法の開発～

石倉瑞恵・白井靖敏・遠山佳治㈹・羽澄直子・原田妙子・幸 順子

平成21年度～平成23年度の本機関研究では、平成23年1月～2月にかけて全教員（非常勤講師を含む）を対象とした「学習成果の評価方法に関するアンケート調査」を実施しています。

中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」においては、成績評価について、「多様な活動の成果を評価する観点」が重要視されています。それは、単に専門的知識・技能の習得に留まらず、下記１～4で示した「各専攻分野を通じて培う学士力」の育成が、現在の大学における学士課程教育に求められているからです。

1. 知識・理解（多文化・異文化、人類の文化・社会・自然）、2. 汎用的技能（コミュニケーションスキル・数量的スキル・情報リテラシー・論理的思考力・問題解決力）、3. 態度・志向性（自己管理力、チームワーク＆リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力）、4. 統合的な学習経験と創造的思考力。

各専門分野の専門科目における個々の評価からは、「市民としての社会的責任」などの態度・志向性の優劣を測ることは難しいでしょう。しかしながら、これら「学士力」の育成を少しでも授業に取り入れ、授業評価にも反映させようという動きは着実にあります。

そこで、本研究会では７～８月に実施した予備調査の結果を踏まえ、上記のアンケート調査より、本学各教員における各科目の成績評価の考え方や学習ポートフォリオ導入等における実態を把握し、総合的な観点における学生評価のあり方を検討していきたいと考えております。（文責：遠山佳治）

機関研究報告　「幼児の才能開発に関する研究」
～幼児の育ち合いを促す保育実践 Ⅲ～

幼児保育研究グループ

今年度の実践である「自然の中における異年齢交流の育ち」をさらに積み重ねて、２学期は、秋の自然の中への園外保育を２度計画しました。全園児一緒に秋を感じること、異年齢交流の中で伝え合い協力すること、森に関心を持って歩くことを目的としての実践では、より大きな成長を見ることができました。5歳児の最年長という意識の確立と、人と自然との触れ合いを通した子どもたちの生き生きとした表情。自然に関する探究心の芽生えの広がり。３歳児の５歳児に対する信頼。４歳児の仲間との経験の深さ。この姿から、第３回研究会において、子どもたちの生き生きとした人と人との交流は、人と自然とのかかわりの中でこそ大きな育ちがあり、それこそが意義あることと再確認できました。自然の中で、様々な姿を想定して、見通した活動を設定していくと、その中で自ら考える力を育てることにつながることを確認でき、さらなる課題も具体化できました。（文責：森岡とき子）

これは なにかな

機関研究報告　「中学生の学力向上に関する研究」
～主体的な学びの姿を求めて～

中学校学力向上研究グループ

今年度は「主体的な学びの姿を求めて」をテーマに研究活動を進めてきました。後期は11月に研究授業（３年生英語）と第147回研究会、12月に研究授業（２年生数学）、1月に研究授業（１年生総合）と第148回研究会を実施し、3月４日にはこの１年の研究活動の総まとめとして第28回研究発表会を開催しました。

それに先立ち２月23日に研究授業（１年生英語）を行いました。今年度から英語では１クラス２展開による20名規模の学級編成や、検定教科書を使わず中高一貫校用の副教材を用いて授業を行うなど、新しい試みを採り入れました。その根底にあるのは、「名女2015プラン」で打ち出した「高い学力を育て、自立心を養う」という教育方針です。この点を強く意識し「音声活動を重視した教材の活用」をサブテーマに提案型授業を行いました。

研 究 授 業

研究発表会では、活動報告として１年間の研究授業及び夏期研究合宿を通じて得られた成果と課題についての発表を行いました。まとめの中で、今後よりいっそうの質的向上を求めていくためには教員の更なる努力が求められる、との見解が示されました。（文責：福田 誠）

機関研究報告　「高校生の学力向上に関する研究」
～思考力を育み、生徒が主体的に学習に取り組む授業のあり方～

高等学校学力向上研究グループ

研究授業

総合科学研究所と連携した高等学校の研究活動も４年目を迎え、今年度は「思考力を育み、生徒が主体的に学習に取り組む授業のあり方」をテーマに掲げました。

思考力を育むには、生徒が主体的に学習に取り組む授業が有効であると考え、研究していくことにしました。11月25日（木）～26日（金）に研究会メンバーが５教科各１時間ずつ研究授業を行いました。この日に向けて、日々の授業を見つめ直しつつ研究会メンバーの教員同士で指導案の検討を重ねました。11月26日（金）に、名古屋女子大学の先生をお招きし、高校の教員とともに研究授業の反省を含めた研究会を行いました。

11月から12月にかけて研究会のメンバーが、「京都市立堀川高等学校　第11回教育研究大会」「筑波大学附属駒場中・高等学校　第37回教育研究会」「筑波大学附属高等学校　第60回教育研究大会」のいずれかに派遣されました。そして、授業参観や研究大会参加を通して、どのように生徒主体の授業を実践しているか研究しました。

２月26日に今年度の研究の総括として、教育講演会が行われました。　（文責：秋田武史）

プロジェクト研究報告　「教員養成課程における実技教科指導内容の検証」
～小学校教育現場の卒業生からのフィードバックによる～

伊藤充子・亀山有希・小林田鶴子㈹・佐地多美・渋谷 寿・和井田節子

本研究では、本学卒業生（卒業後５年未満と10年以上）の現職小学校教員に、小学校の実技教育の現状と大学での授業がどのように役立っているかという内容のアンケートと、聞き取り調査を行いました。その結果、次のようなことがわかりました。

まず、今回調査した小学校では、音楽の専科教員は比較的多かったものの、体育専科は全く居らず、学校行事を含め、学級担任が何らかの形で実技指導に携わっていることがわかりました。その点で、大学での模擬授業等の実技が現場で役立っていることが確認されました。また指導で困ることに関しては、音楽の器楽指導や図画工作の絵画指導、体育の技の指導など、児童の能力差がみられる技能指導が多数を占めていました。そしてその対応については、指導経験を重ねた教員は児童の特質を見極め、児童による模範演奏などを取り入れていることもわかりました。しかし、絵画で「頭足人」を描いたり、校庭のトラックに沿って走ることができない等、幼児の発達段階に見られる現象が小学生にも起こっていることがわかり、小学校でも幼児の指導方法を知っていることの重要性が浮き彫りにされました。こうした現状を踏まえ、来年度は、幼児教育を視野に入れた同様の研究を行う予定です。　（文責：小林田鶴子）

平成23年度プロジェクト研究

総合科学研究所では、自然科学・人文科学等の専門分野の枠にとらわれず、理論研究または実践活動の振興を目的として、学際的かつ複数の研究者による共同研究を助成しています。選考の結果、次の研究が平成23年度、新たにスタートします。

「実験を取り入れた参加型理科教育の推進に関する研究」

市原千博㈹・宇野民幸

筆者はかつて大学の研究所で原子力の仕事をしていました。顧みれば、理系の授業、特に中学・高校時代のそれは毎回、目からうろこが１枚１枚はがれていくような新鮮な驚きと喜びがあり、筆者の理系への道を決定してくれました。

物理や化学が若い人たちに、おもしろい学問として受け入れられなくなって久しいように聞きます。昨年度から物理の講義を担当するようになり、第一に考えたことは、筆者が物理を勉強して驚き、感動した経験を共有したいということです。物理が、ともすれば小難しい公式を暗記して、現実離れした事象を無理矢理理屈付けする嫌いな科目の筆頭になっているとすれば不運なことです。

そこで物理という学問のおもしろさを伝えるために実験を取り入れてみました。その中で、身近にあるものが意外な変化をし、また異なった現象が以前の現象と結びつき、次第に壮大な物理の世界に誘われていくような授業を展開すれば、きっと学生たちの今後の人生に科学の心が住み着いてくれると思います。本研究で、よりよい授業を展開する方法を追求するつもりです。

（文責：市原千博）

「教員養成課程における実技教科指導内容の検証(2)」～幼児教育現場の卒業生を中心としたフィードバックによる～

荒井康夫・伊藤充子・小林田鶴子㈹・佐地多美・渋谷寿・吉村智恵子

平成22年度に、同テーマで、本学卒業生の現職小学校教員を対象に、小学校の実技教育の現状と大学での授業がどのように役立っているかについて、アンケートと聞き取り調査を行いました。その結果は、上記の報告にも挙げているように、小学校でも、幼児教育の発達段階を知った指導を行うことの重要性が浮き彫りとなりました。この点を踏まえ、23年度は幼児園を中心とした同様の研究を行います。研究方法は22年度と同様ですが、幼稚園の場合は小学校と違い、音楽・図工等の教科に分かれていないため、表現領域として総合的に検証を行いたいと考えています。

加えて、採用試験には、ほとんどの自治体・園で実技が課されていますので、採用試験対策としての授業検証も行う予定です。また、22年度の研究を補完する意味で、幼小連携授業についての調査を行うことも考えています。

なお、プロジェクト研究のメンバーは、音楽・美術領域は昨年度と同様ですが、体育には幼児保育学専攻所属の荒井康夫、幼児教育分野での研究者として吉村智恵子付属幼稚園長が加わりました。　（文責：小林田鶴子）

総合科学研究所主催 平成22年度 大学講演会（9月17日）

「戦後教育と日本人の真情再考」 講師：和田修二氏（本学文学部・大学院人文科学研究科教授）

平成22年度 大学講演会

平成22年９月17日（金）、研究所主催の大学講演会では、本学文学部・大学院人文科学研究科教授の和田修二先生にご講演をいただきました。

和田先生は、これまで長く教育現場に立たれているご経験を基に、明治の近代化以降、わが国が根本的にかかえる教育問題、そして現在直面している教育危機の本質とは何かを問題提起し、自らの考えをお話下さいました。また、戦後日本において明確な目的と理想を持っていた先覚者として挙げられる綴織工芸家・遠藤虚籟の人生との出会いや、戦争を体験して学んださまざまなことを通して、戦後、日本人が求められている教育とは何かを、熱のこもった言葉で語って下さいました。自らのご経験と戦後を駆け抜けた遠藤虚籟の人生を通して語られるお話は、私たちの心に響く興味深い内容でした。

和田先生は、今後の教育界において、本学のような人間教育と深く関わっている大学こそが、大きな可能性を秘めていると話されました。学園訓である「親切」の意味を再考すると共に、本学の更なる発展に繋げるきっかけとなる大変貴重な講演会となりました。

第４回 高等学校教育講演会（2月26日）

「『いのちの教育』のゆくえ～パッケージ化される『生死』～」

講師：大谷いづみ氏（立命館大学産業社会学部教授）

第４回 高等学校教育講演会

２月26日に今年度の研究の総括として行なわれた第４回教育講演会では、立命館大学産業社会学部教授の大谷いづみ先生をお招きして「『いのちの教育』のゆくえ～パッケージ化される『生死』～」をテーマに講演して頂きました。

現代は核家族が増えたため人の死に直面しないまま大人になる子が多くなり、リセット可能なゲームで育ち、パックになった肉や魚しか見たことがない現代の子どもの死生観・生命観を考えると、「いのちの教育」は極めて重要なテーマと考えられます。

「生死」について大学で学問として研究されている先生の講演という貴重な機会に恵まれ、高校生・大学生が死生観について考えを変えた実例などを拝聴し、「いのちの教育」について考え直す機会となり、身の引き締まる思いになれた貴重な経験となりました。（文責：秋田武史）

第28回 中学校教育講演会（3月4日）

「主体的な学びとは」講師：梶田正巳氏（現椙山女学園中学校高等学校校長・元名古屋大学教育学部長）

第28回 中学校教育講演会

梶田正巳先生をお招きし、「主体的な学びとは」と題してご講演いただきました。先生は気さくな語り口で、教師と生徒との関係のありようについて分かりやすくお話しくださいました。中でも「全員を特別扱いするほうがいい」というひと言には、はっと目を見開かされる思いがしました。先生がおっしゃられた「あなたを特別な人間として見ているよ、というメッセージ」をどのように生徒に伝えていくか、今後私たちに課せられた課題であると感じました。

後半は「勉強の必要性を自覚させる指導内容・計画をどう立てるか」というテーマのもと、教科ごとに集まってディスカッションし、その結果をお互いに発表し合う時間を設けていただきました。先生からは「かんじんなことは、ディスカッションの内容を日々の授業に落とし込んでいくこと」とのアドバイスをいただきました。先生の「授業はクリエイション」ということばには、本校が更なる学力向上への取り組みを推し進めていくためのヒントが詰まっている気がしました。（文責：福田 誠）

今年度運営委員

委員長
原田 妙子 HARADA Taeko（短期大学部）
石原 久代 ISHIHARA Hisayo（家政学部）
市原 千博 ICHIHARA Chihiro（短期大学部）
竹内 若子 TAKEUCHI Wakako（家政学部）
羽澄 直子 HAZUMI Naoko（文学部）

研究所メンバー

所長 竹尾 利夫 TAKEO Toshio
顧問 河村 瑞江 KAWAMURA Mizue
主任 渋谷 寿 SHIBUYA Hisashi
講師 越原 もゆる KOSHIHARA Moyuru
職員 今峰 可南子 IMAMINE Kanako

編集後記

ここに総合科学研究所だより第12号をお届けいたします。執筆にご協力いただきました関係者の皆様に感謝申し上げます。本号では、総合科学研究所が取り組んでいる機関研究の成果、地域貢献事業の報告、講演会の報告など最近の事業内容をお伝えしました。その中で、大学の社会的貢献としての、公的組織と連携した地域貢献事業は、大きな成果を上げるとともに本研究所の重要な活動として定着してきました。総合科学研究所の意義をご理解いただき、ぜひこれらの事業にもご協力いただきたくお願いいたします。

文責：渋谷 寿

名古屋女子大学 総合科学研究所だより
平成23年3月31日 12号
発行・編集/名古屋女子大学 総合科学研究所 〒467-8610 名古屋市瑞穂区汐路町3-40 TEL052-852-1111(代)
本誌記事、写真の無断転載を禁じます